

第 26 期  
活動方針

## 社会の中で祈りの実践を

# キリスト者として



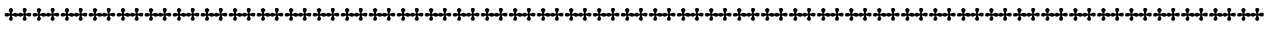
### キリスト者として社会の中で生きる

谷口和恵

『平和…戦争や暴力で社会が乱れていない状態のこと。差別や貧困、いじめもなく、人々が安心して尊厳を持って暮らせる状態であること』とあります。これによると私たちを取り巻く社会は、身近なところから世界の問題までとんでもなく「平和」から遠いのではないかと思えてしまいます。世界では未だに戦争、紛争が止まず、新たな戦争さえ勃発する中、子どもたちを含む多くの命が失われています。国を追われ知らない国で命や身分の保証もなく不安の中で暮らす人たちがいます。身近では、明日の食べ物も住居もなくその日を生きていくのに精一杯の人たちがいま

す。イエス・キリストは神の愛により平和をもたらすためにこの世に來られました。そして実際小さくされている人たちに寄り添い、力づけ、共に過ごされました。私たちは日々祈ることで主に在る平和を追い求める者です。平和を考える時、「祈る」ことは勿論大切です。そしてアクションを起こすことも同じように大切だと考えます。教会の内外でもアクションに繋がる様々な取り組みが行われています。あなたの助けや支援を必要としている人がいます。アンテナを立てて、自分にも“これなら出来るかもしれない”と思われることを見つけたら、是非行動に移してみませんか？ 今回の会報では、「祈りながら行動する者」として3名の方の取り組みを紹介させていただきます。

(26 期女性会連盟会長・松本教会員)



### まことの平和を求めて

俵 恭子

2026 年を迎え今教会の暦は受難節に入っています。イエス様の十字架の死の贖いによって罪から救い、復活によって新しい命の恵みをすべての信じる者に約束してくださった計り知れない神の愛に感謝いたします。福音には試練や苦しみの中にいる人々に愛と平和をもたらす無限の力があると信じます。そしてこの世から争いの火種をなくし、共に生きる平和な世界をもたらすまことの道が示されていると信じます。

現実の世の中は、21 世紀に入って早や四半世紀を過ぎようとしているのに科学分野のすさまじい発達と反比例するかのようには神の創造物である自然環境の汚染破壊はすすみ、自国ファーストの国家間の権益争いは広がる一方で戦火は絶えません。アメリカ、イスラエルのイラン攻撃に怒りと悲しみを覚えます。日本の現政権は両国の国際法違反の暴挙をいさめるところか支持し、安全保障上防衛力を高める必要があるとして、日本を再び戦争できる国へと沖縄から北海道まで全国規模で大軍拡を進めており非常に危険です。

日本は明治維新後から敗戦の 1945 年までの 79 年間、日清・日露戦争、韓国併合、第一次大戦、シベリア出兵、満州事変、日中戦争、第 2 次大戦と戦争に明け暮れていました。沖縄戦、本土無差別空襲、広島、長崎への原爆被害を受けて敗戦後の 80 年間は 1 回も戦争していません。な

ぜか？ 世界に誇るべき戦争放棄を謳った平和憲法があったからです。ところが 81 年目となる今年 1 月末、突然の衆議院解散総選挙で大勝した自民党政権は、日米安保条約と核の傘重視、米軍の指揮下での軍事訓練、国家情報会議の設置、スパイ防止法の制定、憲法改正（9 条 2 項に自衛隊を明記、緊急事態条項の新設など）を目指すなどまるであらたな戦前が出現したようです。防衛は国の専管事項だからと賛否を保留する自治体は全くあてになりません。主権者としての私たちが、声をあげていくしかありません。地元熊本でも、全国各地に先駆けて台湾有事を想定しての防衛強化策が進められてきています。2025 年度内に、西部方面司令部のある健軍自衛隊駐屯地に 1000 キロ先まで攻撃可能な 12 式長射程ミサイルが配備されようとしています。弾薬庫の建設、司令部の地下シェルター化も始まるようです。防衛強化による抑止力向上で住民の命とくらしの安全を守るため、とのことですが標的となった場合に被害を受ける住民の救済は一切想定されていません。過去の歴史の過ちに学び、二度と繰り返さないために作られた平和憲法を心して学び直し、おかしなことにはきちんと声をあげていきたいと思ひます。

以下は日本福音ルーテル教会九州教区が 2016 年 3 月 21 日に出した平和宣言文です。

私たちは、平和を愛するキリスト者として／平和憲法  
の精神を貴び、／すべての軍備増強と基地建設に  
反対するとともに／近隣諸国と、信頼と和解に基づ  
く／平和的な関係を築くことを希求します。

(室園教会員)

# 社会の中で生きる



## 暗闇の中から光のもとに

～岐阜ダルクの支援を通して～

齋藤末理子

20年前のある日、牧師館に一人の女性が訪ねて来ました。彼女は自分が薬物で苦しんだ過去を語り、薬物依存のための回復施設の設立を熱心に訴えました。「岐阜ダルク」施設長・遠山さんとの出会いです。直ちに市内教会に支援を呼びかけ小さな施設が誕生。主人が後援会長となりました。

やがて仲間も増え、市内教会での体験メッセージやコーラス、教会の草刈りやバザー手伝いなどの奉仕にも関わってくれました。アルコールや覚せい剤などの薬物依存者の彼らには反社会的なイメージがありますが、実際は家庭環境の問題や生き辛さを抱えた人達です。施設ではお互いに励まし合いながら毎日依存症と戦っています。

クリスマスや夏休みに帰省できない仲間をわが家に招き、食事や楽しい交わりの時を持って約20年、まるで実家に里帰りする子供のように喜ぶ彼らと共に過ごす時間は私と主人にも喜びの時です。ダルクと教会との繋がりも深まり、クリスチャンになる方も数名与えられました。最近「僕はいつか牧師になりたい」と決意した仲間もいて、彼は今主人と聖書の勉強を始めています。どうかその夢が叶いますように！

一人ひとりが「暗闇の中から大なる光のもとへ引き出された(1ペトロ2:9)」ダルクの仲間たち。その生きた体験を目の当たりにすることができること。神様のお働きを実感できること。私たちにとってこれほど大きな感動と喜びはありません。20年間のダルク支援を通して神様は私たちにも教会にも大きな祝福を与えてくださいました。これからもこの大切な仲間たちと一緒に生きて行きたいと願っています。

(大垣教会員)

\*\*\*\*\*



## 私は隣人になれたのか

市原悠史

2021年3月、名古屋入管でウィシュマ・サンダマリさんが亡くなった事件が大きく報道されました。

私はその出来事に強い怒りを覚え、関連ニュースを追うようになりました。それまでも在日外国人の苦労や日本の難民問題を目にする機会はありましたが、このとき急に関心を持った理由は、「コロナ禍で鬱憤が溜まっていた」そして「暇だったから」という理由です。その中で私は「入管法改悪」という言葉を知りました。詳細は是非調べてみてください。

同年5月初め、入管法改悪に反対する国会前の座り込みデモに一日だけ参加しました。そこで出会ったのが、アフリカのある国から来て日本で難民申請をしているJさんとPさんです。お二人は祖国の惨状を示す写真を並べ、必死に状況を訴えていました。お二人は日本で十年以上暮らし、働き、税金を納め、法律違反や犯罪もなく、私よりずっと真面目に生活してきました。しかし難民申請は二度却下され、その結果就労もできなくなり、収入を失ったのです。私は連絡先を交換し、困ったことがあれば連絡してくださいと伝えました。

数か月後、Pさんから仮放免の保証人になってほしいという連絡がありました。仮放免とは、

ビザが切れた外国人が入管施設への収容を避け、自宅で生活するための制度です。ただし不法滞在の状態となるため生活には多くの制限があり、就労も認められません。それでも収容よりはよい状況です。保証人は保証金(10万～)を負担せねばならず簡単には頼めませんが、私は家族と相談し、手続きを行いました。申請は受理され、この時はPさんは収容を避けることができました。

この経験を通して、日本で暮らす外国人の現状や入管制度の問題を知り、多くの記事やコラムを読むようになりました。私はそれまで無関心であった自分自身こそが、こうした問題を支える構造の一部であったことを痛感したのです。それまでも日本における男女格差について同じことを感じましたが、また深く反省することになりました。現在も大きな使命感というより、むしろ罪悪感に近い思いを抱えながら関わりを続けています。教会の人々とも分かち合い支援してきましたが、Pさんは最終的に日本での申請を諦め、別の道を選ばれました。それでも「出会えてよかった」と言ってもらえたことが、私にとってはせめてもの救いです。彼の人生が良い方向に開かれていくよう祈ります。

(蒲田教会／横須賀教会牧師)

